

国立国語研究所学術情報リポジトリ

『日本語歴史コーパス（CHJ）』の教育利用の実践 報告：高校の古典の授業における活用例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): Corpus of Historical Japanese (CHJ) 作成者: 宮城, 信, 江口, 遼至, EGUCHI, Ryoji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001652

『日本語歴史コーパス(CHJ)』の教育利用の実践報告 — 高校の古典の授業における活用例 —

宮城 信(富山大学 人間発達科学部)*

江口 遼至(金沢高校)

Practice Report on Educational Use of " the Corpus of Historical Japanese (CHJ)" : Examples of Japanese Classical Literature Classes for High School Students

Shin Miyagi (University of Toyama)

Ryoji Eguchi (Kanazawa High School)

要旨

本稿は、日本語歴史コーパス(CHJ)を活用した学校現場での実践報告である。CHJを学校現場で利用するためには、様々な制約がある。一方でCHJの教育利用は始まったばかりであり、電子教科書の普及や教室でのインターネット環境の整備が進みつつある現在、CHJは質的量的に見ても教材・資料としての価値は高く、今後様々な場面での活用が期待される言語資源である。ここでは高等学校でCHJを活用した古典の授業の実践報告を行い、その利点と今後の課題について言及する。

1. はじめに

近年学校教育におけるICT機器を活用した探索的な授業の試みがなされている。いくつもの学校で理科や社会科等の授業実践が公開され、認知度が高まっている。ほとんどの学校では十分なインターネット環境がないが、現在段階的に整備が進み、利用できる端末の数も確保されつつある。今後、各教科の授業の中でICT機器が教材、または教科書として利用されるようになるのはもはや時間の問題であろう。

言うまでもなくICT環境の整備・導入によって授業のあり方は大きく変化していく。もっとも導入が遅れている教科の一つである国語科の授業においてもそれは同様である。翻って国語科の授業で利用できるコンテンツに着目してみると、電子教科書を除けばめぼしいものがないというのが論者の率直な感想である。その点、CHJはすでに公開され基本無償で利用可能である点、古典作品の資料として真正性が高い資料である点、訓練次第で中高生でもどうにか検索できるインターフェイスをもつ点で、現在有望なコンテンツとして期待されるものの一つである。

一方で、いかに素晴らしい資料であっても、それを新規の教材として導入するには授業時数が不足しているというのが現場の認識であろう。また、授業内容は十分に成熟しているため他のものに簡単には置き換えにくいと思われる。特に古典の学習についてはその傾向が強い。例えば文学研究の成果である専門の辞典や本文索引等が教育の現場で活用されることは管見の限り見受けられない。このような現状に鑑みても、単純に利便性が高く先端的であるという理由だけでICT環境や機器を導入しても新しい形態の授業に移行することは難しいのではないかと思われる。現場で求められている資料は、研究者の必要としているそれとは異なることを認識し、現場に即した資料の開発とそれを活用した実践方法の指南を発信していかなければ、国語科の授業を大きく変えることは不可能である。

* miyagi@edu.u-toyama.ac.jp

2. 国語科の授業における CHJ 機器の活用

CHJ を活用した教材による言語活動や検索結果に基づき作成された資料を利用して学習を行うためには、教室で利用可能な、学習者の数に応じたある程度の台数の ICT 機器があることが望ましい(標準的な学習であれば、4, 5 名に 1 台程度)。本研究では CHJ 利用デバイスにタブレット端末を採用した。赤堀(2015)でも指摘されるように、「タブレット端末は、形や仕組みはパソコンに近いが、人との関わりの観点からは、パソコンよりも紙に近い。(中略)タブレット端末は、直接に指でタッチする。」(: p.13)という特性を有している。保守的な国語科の学習(特に古典の授業では、これまでの学習方法を堅持することにアイデンティティを感じているようにさえ思う)において、例えば端末室でデータの検索を行うような ICT 機器の導入は相応の障害があるように感じている。一方、タブレット端末であれば、教科書やノートと一緒に机の上に並べて置くことができる。また現状では ICT 機器は授業中のスポット的な使用に留まっており、比較的小型のタブレット端末であれば必要に応じて授業の途中で自由に出し入れができるという点も利点であると考えられる。

3. 高校における CHJ を活用した古典の授業の可能性

中学校で古典作品に触れることがあっても、本格的な古典の学習が始まるのは高校 1 年生の「国語総合」の授業からである。したがって古文の資料やデータに意味を見出すことが期待されるのは、学習を進めて古典知識などをそれなりに習得した高校 2 年生以降と考えられる。ただし、学習の入門期である高校 1 年生であっても、課題を現代的な内容と関連付けて設定したり、現代人の思考に結びつけたりすることによって、学習を成立させることは可能である。よって、CHJ の新規の教育的活用法を模索する本研究では、導入のハードルを低くするために、あえて入門期の高校 1 年生を対象として、CHJ を教材に用いた古典の授業を提案・実践した。

4. アクティブ・ラーニングを意識した古典の授業

4.1 古典におけるアクティブ・ラーニング学習の課題

1 節で現在の古典の授業が硬直化していることを指摘した。しかしながら、指導要領の転換期を迎え、今後古典の授業においてもアクティブ・ラーニング学習化の要求は確実に高まってくると推察される(もちろん全ての授業をアクティブ・ラーニング学習化する必要はない。ただ様々な単元において試行しておくことは必要である)。

河添編(2018)では、「アクティブ・ラーニング型授業」と「アクティブ・ラーニング(学習: 論者註)」を区別すべきと主張する。後者が目指すべき学びの形で、学習者が主語(学びの主体)となるべきものであると述べている。その実現のためには「授業中に話す、教える、評価するといった行動を学習者に引き渡す」(: p.17)ことが重要であるとする。すなわち課題を立てる、調査する、吟味するという学習活動を学習者に委ねることである。

仮にこの指摘に従い、それらを学習者に引き渡したとして、古典の授業ではおそらく多くの学習者は一歩も前に進むことはできない。文学的作品に関する知識、古典常識、古典作品に関する直感のいずれもが不足しており、何をどうすれば良いのか、皆目見当も付かないからである。古典におけるアクティブ・ラーニング学習は思いのほか難易度が高い。

一方で、何かを「取り敢えずやってみる」ということであれば、主体的な学習も可能かもしれない。本研究で考える「取り敢えずやってみる」ことを可能とするツール(教材)が、CHJ ということになる。ただし CHJ を現場で有効に活用するためには、様々な準備と先にも述べたように実践の指南が必要であると考えられる。以下、論者らが試みた CHJ を活用した古典のアクティブ・ラーニング学習について紹介する。

4. 2 気になる言葉を調べる

多くの場合、中学校段階の古典の学習では、教師が本文から指定して重要語句(内容の解釈や授業の展開に欠かせない語句)を取り上げて解説する。高校の古典の学習では、それ以外にも本文を読み込む中で気になった語について辞書等を利用して学習者が自ら調べることも多い。その際、辞書の語釈が調べたい箇所を説明するには不十分であれば、用例に頼るしかないのであるが、例解古語辞典であっても、紙幅の都合もある紙の辞書では用例はさほど多くは示されず、調べている箇所そのものが用例として上がっていることも少なくない。

これに対して、CHJ は適切に検索することができれば、いくらでも用例を手軽に採集することができる用例の宝庫である。コーパス等 ICT 活用の最大の利点は、表計算ソフトなどを利用して、多様で大量の情報の収集、整理が容易に行えることにある。第二の古語辞典と考え、従来型の古語辞典と並行利用することによって、古典作品に対する理解をより深めることができる(特にタブレット端末を利用すれば、授業中の出し入れも自由で電子辞書感覚で利用できる)。

4. 3 作中の言葉から作者のものの見方や考え方を探る

高校の古典の授業では、一通り読解した後、本文中から作者のものの見方や考え方を表した箇所や語句を探し出すという学習が散見される。学習者の思考の流れを教師がコントロールし易いという点では安心感のある学習である。石塚(2008)が「作品の知識をもたせることは否定しないけれども、それに終始する古典教育であってはならない」(: p.3)と指摘するように、時には学習者の興味関心に従って、教師の掌から飛び出して作品と向き合う学習活動も必要である(4. 1 節の河添 2018 の指摘も同様にとらえられる)。しかしながら、本文だけでは新たな疑問を発見するには短すぎるし、また、その本文もそれまでの学習で教師によってあらかた掘り尽くされている。本文以外にそれを求めようとして、辞書や文学全集を利用したとしても、残念ながら多くの学習者にとってはそれは相当高難易度の学習活動と言えよう。

そこでこの問題の解決のためにはコーパスを利用した学習が最適であることに気付く。コーパスで検索することによって、対象が作品全体に一気に拡大するため、教師が意図した範囲内に収まらないこともある。また CHJ を利用した調べ学習では、検索が容易であるため、以下の本稿での実践のように特定の答えを想定せずに様々な語句を手当たり次第検索(「取り敢えずやってみる」である)した結果から、作者がどのような人物であったのかを想像するといった探索的学習も可能である。その結果、予想外の新たな状況が浮かび上がることもある(教育活動であるので、ここでは敢えてその真偽は問わないことにする)。

このように、グループ学習にこだわらず、また既習の学習方法にとらわれることなく、得られた結果を批判的に解釈してどのように消化していくかが目指すべき高校生段階での古典のアクティブ・ラーニング学習と言えよう。

5. 授業実践の概要

5. 1 授業計画

本稿で報告する授業実践は以下のように実施された。

5. 1. 1 実践協力校

本実授業実践授は、平成 30 年 3 月 26 日に私立金沢高等学校(石川県金沢市)で実施した。授業参加者は高校一年生の特進クラスの生徒で、授業者は同校の江口遼至教諭、論者(宮城)は CHJ の利用補助などを行う授業補助者として実践授業に参加した。また授業は公開授業の形式で実施され、後に述べるように多くの参観者があった。

5. 1. 2 授業準備

・CHJ 利用アカウントの用意

CHJ を利用するためには、利用者が個人で利用アカウント申請をする必要がある。今回は投げ込み教材的な実践であるので、実践協力校の国語科教員にも依頼して、複数のアカウントを確保した。学習の形態にもよるが、一クラス 35 人前後として、4,5 人グループ毎に 1 台程度の端末が用意できれば ICT の利用環境としては十分である。

・ICT 環境と利用端末の用意

今回の実践協力校である金沢高等学校は、すでに教室にインターネット環境が整備され、学習者が個人のタブレット端末を所有しており、基本的な操作は習得済みであったため CHJ 導入時の問題は少なかった(なお、先に述べたように教室で CHJ を利用するための端末としてはタブレット型が最適である)。

・資料の用意

教科書(『新探求国語総合(古典編)』(桐原書店)の他に、本授業で使用するワークシートと検索する語を見つけるための『読んで見て覚える重要古文単語 315』(桐原書店)を準備させた。

5. 2 実践報告

本稿の授業実践は、「国語総合」の古典の授業として、3 時間で実施された。教材は「徒然草」である。「徒然草」は比較的多くの章段を学習済みで、筆者の考え方を自分の考えと比較することが容易であると考えたからである。なお、文中の()内は前掲の学習活動のおよその時間を示している。

[第 1 時]

「徒然草」の復習と CHJ を利用するための準備にあてた。

[第 2 時]

本実践の主要部は本時である。簡単に前時での課題「作者のものの見方や考え方について」の確認と検索方法の復習をした(5 分)。

本時の目標は、CHJ を利用して、『徒然草』の使用語彙から、「作者のものの見方や考え方を探る」という課題である。このクラスはこれまで「徒然草」の八九段(奥山に、猫又といふものありて)や、第二三六段(丹波に出雲といふ所あり)などの章段を学習してきている。それも踏まえて本時では「徒然草」全体を対象として形容詞や形容動詞の使用状況(使用頻度の偏り)に着目して、課題に取り組むことにした。学習者が主体的に検索する語を決めて、「取り敢えずやってみる」という調べ学習である。調査協力校では学習者一人一人がタブレット端末を所有しているが、基本的な作業は 4 人グループに分かれて行い教科書や単語帳を利用して調べ学習を行った(20 分：次頁 写真 1)。

CHJ では、検索結果は、現代語訳のない本文のみが表示される。検索結果の誤読を防ぐために、必要に応じて web で現代語訳の紹介サイト(誤訳の少ない確認に適切なサイトを事前に教師が紹介)を参照することも推奨した。検索結果を語別に使用頻度と代表的な用例をワークシートに記入して整理させた。



写真1 タブレット端末を利用した調べ学習

教科書や単語帳で当たりを付け、検索にはタブレット端末を用い、紙のワークシートに記録するという、新旧の学習材を並行利用した学習活動で、ICT機器の導入において現在もっとも抵抗が少ない授業形態であると言える。また、教育効果も期待でき、赤堀(2015)では複数の異なるメディアを並行利用することによって学習効果も高まると指摘している。



写真2 タブレット端末とワークシートの並行利用

クラス全員のワークシートの内容を集計すると、検索された形容詞・形容動詞は全部で54語あり、検索した人数が多い語は以下の通りであった(5分)。

(12名): くちおし、(11名): こころにくし、(10名): いみじ、めでたし、(8名): をかし、(7名): あさまし、(6名): わろし、(5名): なまめかし、むつかし、(4名): ゆゆし、(3名): あはれ、あやし、うるはし、けし、さかし、まさなし、むげなり(以上、上位17語)

本時の目標である「作者のものの見方や考え方を探る」という課題解決のために、多くの学習者が検索した上位17語のうち、ここでは下線の8語がネガティブな意味の語と解釈できる。もちろんこれらの語がすべて作者である兼好法師のもののとらえ方を反映しているわけではないが、これまでの学習で学習者らがとらえた作者像の一端を表しているように思う。その後、ワークシートを基に、グループ内で整理した語から、作者のどのようなものの見方や考え方、人物像が見えてくるかを話し合い交流した(10分)。

交流時にワークシートの記録を参照したり、タブレット端末上での検索結果を示したり、学習者がもっとも有効であると考える方法で意見の交流を行っていた。他教科の授業でタ

タブレット端末を利用した経験を持つ学習者であったので、比較的容易にメディアの使い分けを行えたのではないかと推察する。



写真3 タブレット端末での交流

この段階でも、学習者から「ものごとを二極化してとらえる傾向がある」「理想の人物像がとても高いためほぼ全員に対して物足りなさを感じている」といった、前時までの授業では指摘のなかった、新たな作者像が提出されており、CHJの活用によって学習者らが新たな視点を提供できる可能性が示唆された。

授業のまとめとしてタブレット端末の google フォームを利用して振り返りを入力させ、即座に集計してスクリーンに写し出し、「User Local テキストマイニングツール」(<https://textmining.userlocal.jp/>)を利用して、提出された意見をビジュアル的に関連付けてクラス内で共有した(5分)。

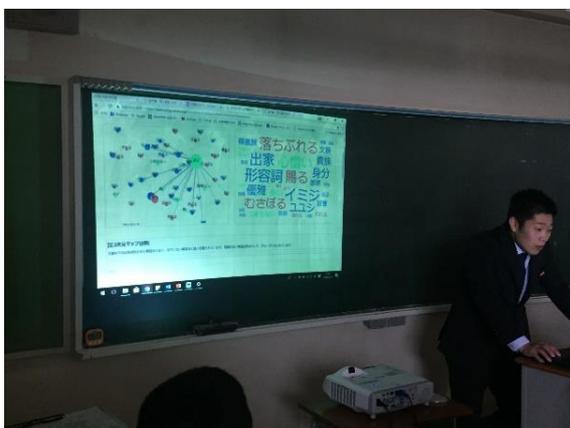


写真4 テキストマイニングツールでの共有

時間が許せば、プロジェクトで投影された内容を基に、グループ内で話し合う交流の機会を設け、他人の様々な意見に触れることで、作品に対する理解を一層深められると考えられる。本稿の実践授業では時間の制約から交流の場を割愛せざるを得なかった。

[第3時]

図書館に移動して実施した。まず、前時の復習として、第2時に google フォームで共有した振り返りをプリントにまとめ配布した。それを読んで、自分と異なる意見やよく分からない意見を見つけ、なぜそうなるのかを書いた本人に確認するという交流を行った。

必要があれば CHJ を利用して追加で調査した。調べたい内容によっては、CHJ より現代語訳や頭註がついた『新編古典文学全集』(小学館)で当該の章段に当たる方が良い場合もあるので、図書館の資料にも当たるよう促した。その際、図書館司書に調べ学習の補助を依頼した。本実践のような調べ学習では、CHJ だけで完結することはなく、文学全集等も含めた他の媒体と相互に活用することで理解を深めていくべきである。

5. 3 教室の状況

本研究のような外部の研究者が協力して実践された ICT を活用する国語科の授業は、ICT を活用した授業を多数実施している金沢高校(現在文科省から研究指定校の認定を受けている)においても新しい試みであった。そのため多くの参観者を迎えることができた。日頃から各教科で ICT を活用した授業に取り組んでいる教師らにとっても ICT を活用した国語科の授業は関心の高いものであることが伺える。



写真5 参観者で賑わう授業(第2時)

6. 今後の課題

CHJ は、当面のところ用例検索用の第二の古語辞典として、または、調べ学習用の支援ツールとして、スポット的な発展的な古典の学習の中に組み込んでいけば十分である。いずれ改善されるであろうが、多くの教室では未だインターネット環境が十分ではないし、学習用コンテンツとしてみても現行の CHJ ではまだ十分には現場の要求を満たしていないからである。一方で、全てではないにしてもアクティブ・ラーニング学習への転換が求められている現状に鑑みると、論者はいずれ間違いなく CHJ が古典の学習において不可欠な学習材(または支援ツール)になると確信している。それに向けて、今後継続的に多くの実践者が継続的に CHJ を活用した実践を積み重ねていくことが肝要である。

謝 辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」による成果の一部である。

文 献

- 赤堀侃司(2015)『タブレット教材の作り方とクラス内反転授業』、Jam House
 石塚修(2008)「伝統的な言語文化の尊重に向けて」『月刊国語教育研究』440、日本国語教育学会
 河添房江(編)(2018)『アクティブ・ラーニング時代の古典教育 小・中・高・大の授業づくり』、東京学芸大学出版会
 明治書院(編)(2016)『高等学校国語科 授業実践報告集 アクティブ・ラーニング編』、明治書院